

シリーズ<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑨

## 手づくりが続き、また、新たに<sup>1)</sup>

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて——

阿部 安成

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>②手づくりで詠む、wps244、2016.01

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>③手づくりで偲ぶ、wps250、2016.04

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>④手づくりで悼む、wps251、2016.04

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑤手づくりを保つ、wps255、2016.05

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑥手づくりで伝える、wps256、2016.07

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑦手づくりと、<sup>たか</sup>戦ひと、拳島へ、『滋賀大学経済学部研究年報』vol.23、2016.11 予定

series<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑧手づくりが<sup>おの</sup>震え戦く、wps257、2016.09

2015/4/5 瀬戸内海に霧

**第12号** 第12号の表紙<sup>おもて</sup>は、貼られた白紙に「青松／12号」と左から右へと横書きで、題字と号数が記されている。反故となったその裏面には、土谷勉のペンで「あとがき 灯火親しむ時候」と記しだされた文面がみえる。誌名を記した紙片の右に縦書きで、「昭和二十年九月十五日発行」とある。前第11号が「昭和二十年八月上旬発行」だった。もっと細かくいえば発行の日付は8月15日以前だったろう。前号からおよそ1か月を経て、この第12号が発行された。

表紙をめくると、雄渾な筆でまた「青松／12号」と記された扉がある。目次はない。

**生きぬく** 「巻頭言」には、その末尾に「勉」の署名。土谷はこのとき、なにを、どう

1) 本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2016年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交<sup>ま</sup>ぜる」の成果の1つである。

説いたか。

世界文化に寄与するこそ新日本の目的だとするならば、数ならぬとは謂へ、「青松」の廃刊は意味をなさない。怠惰の表現でしかないだらう。生命ある限りに於て芸術は亡ぶ可からざるものである。／生か死か、生命を絶てばともかく死を厭ふに於ては立派に生きぬくこそ即ち吾らの悲願ではあるまいか

つい1か月まえの本誌誌面でも、生か死か、興か亡かが問われ、死なないにしてもただ生きるのではなく、「自己を持てあまし」つつもなんとか「み民われ」の一員になろうとそのため生を採った療養者たちだったが、それが、「死を厭ふに於ては立派に生きぬくそこ即ち吾らの悲願」と、ここになにであろうともとにかく生きるのだと宣言されたのだった。そのためにも『青松』は継続する。その『青松』誌上療養者たちの生をかかげた宣言の場となったのだが、1部かぎりの手づくり誌を活用しようにも、このときにはまだ、その声はちいさな同人たちの輪のなかで響くにとどまっている。

この土谷の稿は、常務委員会と特別委員会が1933年11月27日付で通知した謄写版刷り文書の裏面が活用されていた。同一文書がさきの第10号「あとがき」と第11号「巻頭言」でも用いられていた。それら2つの稿と異なって、ここでは文書の宛て先が第4号室となっている。戦時下の物資再利用が、このときも継続していた。

**声** 無地のま白い紙に記された綾井讓の短歌に題目はない。

皇のみ声を拝す坐につきて謹みふかし吾れ人ともに／ラジオにし慎み拝す玉御声涕しづかに頬をつたひつ／眼を閉ぢて何を申さむ事もなし大御心を拝しまつれば／兵の数多をすでに死なしめて戦ひおくは悔しかりけり／悔しけれど皇を畏めばたへてしゆかめただにただに

とても整然とした手跡は、綾井の心情のあらわれでもあるか。では、「兵の数多をすでに死なしめ」たのはだれか、「悔し」さは、どこに、だれにむけられるべきなのか。それは問われていないようだ。

**希望** そのつぎに、署名も題目もない稿がおかれている。手跡は林文雄の手になる。

十五日以後の混乱の中にも青松第十二号が生れた。全く貧弱である。併しこの祖国未曾有の混冥の中に纏ったものが出来ると思ふ方が無理である。／兎も角一応一冊にまとまったものを出すだけで勢一杯でなからふか。／先日本館で朝日新聞 12/IXを見てみたら火野葦平が「悲しき兵隊」と云ふ一文を書いてみた。涙を以てよみ了へた。園内に入る四誌の新聞の中三誌は大毎だと聞いたので見落した人もあらふ。二度よんでも良い。／この新聞は保育所行きだったので自宅の十二日の大毎を廻してこれを切り抜いた。／別にして廻さふと思ふていたが今青松が来たのでゆっくりともこれに入れて廻すことにした。／古来立派な文芸は苦境の中に生れた。故国を追はれたダンテは神曲を生み盲目のミルトンは失樂園を完成した。戦勝の時深いものは出来ない。／悲痛を噛みしめ嗟嘆の声をのみ君らが筆を以てその心を刻め、新しい日本ハそこに生れるであらふ／闇が深ければ深いだけ夜明は近い、いかなる場合にも若い目を見開く希望の子でありたい／失望する勿れ失望する勿れ／夜明けは必ず来る、否来らしめやう

これまで林は、誌面末尾の「あとがき」や批評の執筆に徹していたようなのだが、この号では、はっきりと指針を示す文章を巻頭ちかくにおいている。

**農作** 林の稿は二つ折にした原稿用紙の裏面に記されていた。反故となった原稿用紙の文章をみよう――

金は故人の所得となる。彼等は他に作業を持ち農業は一種の副業で娯楽本位なる故大抵一人十坪より三十坪位の小面積を各自の仕事の暇々に来て手入し慰しみとする。／全生  
病院農業沿革 明治四十二年開院され翌年神山復生病院、慰廢園より来た患者は耕作を願ひ出て小面積の栽培が許されたのが農業の嚆矢で爾来入院者の数の増加と共に畑も増し技術も進歩して来たつたはじめは菜類のごとく短期間に生育する者のみで朝夕の食膳につくものは菜許りであつたため当時の落首に次のやうなものが伝へられてある。／顔色の青くならぬが不思議なり／今日も菜びたし明日も菜びたし／現在では促成土当帰の軟化栽培アワレユルームの栽培にまで進んだ。従来この土質にては成功困難とされてみた甘藍栽培に成功し昨年の如きは一個三貫以上の優品を生産し地方の人を驚かした。現

在のところで夏野菜にてはも早他より買入れる要はなく自給自足の目的を  
との前後が欠けた原稿用紙 1 枚かぎりの文章である。自給自足をうながすこの文章は、い  
つ記されたのか。

なおこの四百字詰め原稿用紙は、その欄外に「エトアール・10・20」と印刷されている。  
これまでの『青松』では使用例がなかった。

**悲 憤** 同人たちが現時を詠む。さきの綾井につづいて浅野繁「短歌詠草／八月十五日」

——  
おうけなし玉のみこゑはうちしめる国の悲願を耐へ抜けよとぞ／玉のみこゑ生きてまさ  
しく聴くものをこの大いなるかなしみをかも／雀らのこゑもひそめる昼つかた国の悲憤  
を聴き了りしか／もしやとぞ思ひぬしこと到りしかこのくやしきにかへりみむとす／こ  
のうつつ避くべきならじむしろこの塗炭の涯の光たのまむ

浅野は「おうけなし」と詠いはじめたが、これは冷ややかな憤りの発奮ではないか。「玉の  
みこゑ」が「雀らのこゑ」と対峙させられている。

その裏面はかつての下書き（ここには略す）。

**忘 却** 笠居誠一も、その「短歌近詠」を「八月十五日」と題した——

天地に祈りし誠いれられず恨みを千代に残すくやしき／慎みて玉音を聴く民われの胸迫  
り来てうち伏しにけり／今にして何をか言はむ蝕侵の晴るるを伏して切に祈れり／声を  
あげて泣くに泣かれぬ口惜しさのしたゆ新に力湧き来る／新らしく生きむ意慾に朝ぼら  
け澄み勝り行く空を仰げり／何もかも忘れむとして目を閉づる静寂破りて嵐荒ぶる／水  
をあげて桔梗の花咲く朝の机に向ふ希望を新に／朝戸出の目に清々し濡色の松の葉越し  
に昇る日の光／ふれてみる鶏頭は既に色褪せて真土に黒き種をこぼせる

笠居もまずは「恨み」を詠う。だれへの、なにの恨みか。慎み、祈り、くやしき、意欲、  
希望——ともかくも「新らしく生き」ようとしている。

**愛 国** 第9号、前第11号と寄稿のなかった長田穂波の稿がある。題目は「燃ゆる心」。

(1)八月十五日、噫八月十五日！／胸とゞろかしつゝ静座なし／拝聴する電波のひゞき…

……に／激しき感情と、悲痛の慟哭とが／屋内より戸外へ／山に、海に／日本全土に湧きあがった……。／陽も、月も光りあれど／敗戦の国、われらは暗い／実に断腸の彼の日よ／熱涙は苦杯に溢れ／その後は絶えず／＝毒蛇の如くに＝／わが内に悶へのたうつなり。／(2)噫、真珠湾の一撃より／海に、陸に／『大東亜解放』の理想は勇む／破竹の進軍、連勝の旗風に／暗雲は払はれ次ぎ次ぎに／『自由独立の歌』は／歓喜の曲に高鳴り起りぬ……。／玉砕……玉砕……また玉砕／特攻……神風……また特攻／草木を……荒濤を真紅に染めし／＝犠牲……犠牲……犠牲の血＝／さあれ敵機に都市焼滅／本土に降り原子爆弾の雨……噫！／(3)敗戦の苦杯、泡立ち溢るゝ／飲まざるを得ざる＝皇国の危機＝／事こゝに至りては???／たふとし詔勅玉音を伝えて／＝行くべき新しき道を示し給へる＝／汝ら腰をひきかゝげて起てよ／共に希望の天地を再建せむ……と！／東海貴姫国、百々千代ゆるぎなく／御皇室は輝くべしとの預言あり／民草いまや不滅の生命力を頂き／君民は父子……上下一途に奮起せり／いざ『皇国再建』の熱火に燃え／見事、三千年の宗祖にこたへん哉……。／犠牲の霊にむくひむ哉……。

／((昭和二十年九月三日涙作))／附記／私の心は昼も夜も涙を油と注ぎて言ひ難き愛国の祈に燃えてゐる＝日本が完全に再建＝する迄は、私の心は安居ならないであらふ……！／日毎の報道の一つ一つが私の胸を搔きむしる＝涙は日々新しく我が飲みものである……。／噫……この大試練の火……この火の中より生れ出る『新日本』よ、ヨリ純金の如く、ヨリ貴く高く／ヨリ輝く日本であれと祈る……！／八月三十日、首相宮殿下の記者団への御発表に敬服の頭を垂れて誠に深く反省いたした者である。この首相の下に導かるゝ我ら民草は幸ひであると信ずる。救癩問題の前途も＝国家が安定＝した後に確定するであらふ……兎に角に未だ祖国は危機の颱風の中を脱して居らない、決して心のたずなを、ゆるめてはならない！／この詩一篇は涙に燃ゆる心の息吹きである。愛誌『青松』と共に永く紀念と致したいと念ふ。九月二日これを草し、今日四日国会開催の日、祈りつゝ記す。／＝リュマチの気味未だ去りがたき床にて＝／穂波合掌ひとまず、長田の混沌とした感慨、とのべておこう。ただ9月初旬、すでに彼も「新」を

目指しつつある。「涙作」の語は、そこへの区切りとなるか。

**下書き** 長田の稿は、4枚の原稿用紙裏面に記されている。罫目があるかつての表面には、なにかしら下書きがある。

4枚めの裏面——

目次／第一章／一、『神』への瞑想／二、宇宙の瞑想／三、人間の登場／四、エデンの園／五、最初の人と結婚／六、サタン……蛇／七、罪とは何ぞや／八、神の審判／九、罪よりの逃遁／十、供へ物／十一、十字架の道／十二、地上の文化／十三、方舟に入るべし／十四、汝ら世に在て悩多し／十五、酒に酔ふ者／十六、バベルの塔

信仰にかかわる書物の目次らしいが、該当する刊行物は、わたしには、おもいあたらない。

2枚めの裏面——

十七、其後の文化遺蹟／第二章／一、瞑想は燃ゆる！／二、我母、わが兄弟とは？／三、たゞ信ぜよ！／四、信者も人間なり／五、神の恩寵／六、ロトを想ふ／七、祈禱＝＝／八、アブラハムに＝＝／九、火＝／十、神の時／十一、大試練モリヤ山／十二、子は神の＝／十三、優＝信仰／十四、血＝／十五、選び給ふ神／十六、＝法／十七、一夫多妻の禍

1枚めの裏面——

十八、ぬすらえる／第三章／一、十二の族長／二、作夢者／三、わなより／四、日本人と彼！／五、夢をとくもの／六、『忘』／七、神われを使はし給へり／八、言（ことば）／九、真の光／十、神の子／十一、義しき人／十二、『死！』／十三、神の計画と信者／以上

3枚めの裏面、原稿用紙の欄外には「89」のノンブルがある——

つゝある。パピロンは斯くて建ち斯くて倒れ、羅馬も又斯くて起り斯くて崩れたり。然るに現代も又〇〇〇〇や×××や世界至る処に大夕立、小夕立が頭を表しかけてゐるのである……！／此処にバベルの塔の瞑想の重要点がある＝と想ふのである。！／さて内乱が地震が兎に角も『思想混乱』をして相互に言ふ処が異なり主張がくひちがひ、つ

いに甲の言ふ処を乙は理解し得ず、乙の主張を丙は受け難くなつた事は『聖句の上より』  
察せらるゝ……バベルの塔の崩壊を単なる外側よりの原因と観ずして、深く内に観る処  
に聖書の偉大なる権威と信ずるものである／地上的にのみ見ず神の摂理の上に見る処に  
此の処を学ぶべき将来性がある。／ノアの子達を人種学的の純学究上より見て論するに  
は＝聖書はいさゝかもものたりなさを感じず＝これは聖書が学問的な書でなく人類と  
神との関係を目的に記さゝれてゐる故

と、ここで原稿はとぎれている。

**大きな空洞** 土谷勉の稿もまた、時局をとりこんだ表題となつた——「八月十五日以後」。  
半ペラ原稿用紙10枚の長編である。

承諾必謹以外に吾々の生きる途が他にあらうとは夢にも思はぬが、時局の急変で読書するにも迷つてゐる者は私ばかりであるまいと思ふ。迷ふことは平素の信念の程も疑はれる訳だが、感情が理窟に追従出来ぬのが通有である。あまり衝撃が大きかつたゞけに私の場合など未だ落ち着きを取戻せない有様である。ラジオなど降伏調印日の九月二日夜から毎晩娯楽放送してゐるが、あれで娯しめる聴取者より、それで娯めると思ふ放送局あたりの頭はどんな仕掛になつてゐるのだらう。羨しい調法さである。／あらはに言へば何を聴いても見ても私は面白くない。あたかも四辺がグラグラ揺動してゐるやうな苛立たしさを覚え、ともすると自分を見失ひ勝である。時世の転変が急なため身体が調和出来ないのだ。私と時世との間に大きな空洞を出し、一切の思考をそこが虚無にするのだ。／昔エレア学派のゴルギアスは基準の存在を否定して虚無主義を唱へたが、一切を仮象の世界とすれば死より他はない。／私と時世との間の隔てを今のところ如何うめようとも私は強いて思はない。迷ふのも落著かぬのも皆それぞれによいことである。降伏といふ冷厳な事実から目を外して誤魔化すより、直視して泣いた方が幸である。／基礎的勉強をしておきたいと思はぬ訳でもない。修養など時も場所も選ばぬものである。時も場所も選ばぬ修養にしても然し心掛けが大切である。第一義のその心が落著かぬときは策の施しようが無いではないか。他日を期すには雌伏が必要でこの期に基礎的なものを

読んでおくことは必要中の必要であらう。俳句に素人の私だから歳時記も読みたい物の一つである。一つでも多く先人の立派な遺作を玩味しておきたい。／先日歳時記から時のものゝ「間引菜」「貝割菜」を拾上げ詠みかけたがものにならず終ひで淋しかった。「日本演劇物語史」を机の上に置いてみたが、繙きもせず旬日経過した。上空を掠める爆音一つにも心が掻乱れるやうでは何も彼も実が入らぬ。／あれこれと小説を拾ひ読みする。一切が偽善的に又癩の種である。言論の洞開は施策の大方針と承るが、だとすれば此の間までの何処から何処まで真であつたのか、識る由もない。疑念は解けぬ。疑へばきりが無いし、疑へば結局、懷疑の洞窟が大口を開け、暗黒の彼方で虚無がしたり顔に笑みかける。洞の中は身ぶるひするやうに暗い。／もつと科学的物の見方を養ひたいが、三十過ぎて菜種の花弁を数へてみても始らぬ。米英よりソ聯に興味のある私はソ聯の文学にも親しみたい。哲学や社会科学にももつと目を啓きたいが、さうさう恰好の物が得られる訳でもなし、得られた処で読めさうにない。病気でなかつたら人間臭のない山奥にでも隠れ十年も凝つと考へたり読んだりしたいと思ふが、そんな慾は此処の話題にもなり兼ねる。迷ふてばかりも居られぬから為さねばならぬことは一応し、畑作りに行きはするが憂鬱<sup>うつうつ</sup>しいことである。／国家や民族の長い生命から眺むと私の思想的混乱など取るにも足らぬ一瑣事に過ぎなからう。大きな目で悠久の歴史を凝視すべきだが、迷ふ時には迷ふより救ひがない。独りよがりの広告を弄してみても真理のないのが人の胸を衝ちはしないだらう。迷ふのは勝手である。揚句に正しい道を発見すればよいのだ。／釈迦は十二因縁によつて生死苦界の輪廻を説き、解脱涅槃を得る絶対無我を理想とした。なるほど絶対無我には苦しみも悲しみも迷ふも迷はぬもない絶対無我なのだが、お茶が飲みたい菓子が食ひたいでは解脱も涅槃もないお笑ひ草だ。転迷開悟を果す実践上の相違と言ふかも知れぬが、「絶対無我」を理想とする仏の道にさへ、禅だ、浄土だ、真宗だ、真言だ、と、「我」の存在することを思へば、言は易くして行ずることの何と難きか――。／とにかく今の私は出来不出来は別としてもつと基礎的な物を読んでおきたいのが念願である。知らぬ文字一つ覚えても得だし、よい小説を一行でも多く読んで魂を淨けるこ

とが出来ればこんな嬉しいことはない。迷ひも正しい途を得るまでの過程と思へば幾らか慰まう。／嗤ふ勿れ、このやうな駄文も或は一里塚として快く許していただけるのではあるまいか。

原稿は2から10までのノンブルがうたれた（1はなし）、10枚の謄写版刷り様の柀目に記され、さいごのページの裏には、「一畝ゆがんだまゝに貝割菜／畝合に三ツ四ツこぼれて貝割菜(勲)」との署名と2句がある。

「八月十五日以後」の、「思想的混乱」とそれを抜けだす展望とが率直に記録されている。

**かがく** 大田井春峰は、稿を「夢」と題した。

昨日まで烈しかった戦争がぱつたりと終結したので全く夢の様でならない／しかし静かに考へる時、大御心の程誠に恐れ多い極みである、園長先生から「我等の行くべき道」と題して放送された誠に感激し皆熱心に拝聴した、それにつけても案じられることは出征されてゐる守屋、青山、大島の先生方を初め職員方の身の上である、この島へお迎へ出来る日の早からんこと念じてゐる／しかしこの戦争に驚いたのは何んといつても原子爆丸である、化学は人を殺す実に恐ろしいものだ、また化学に依つて人を生かすこと病を治すことも出来様よう、一滴の注射液で癩も癒すことも将来出現するかも知れない、原子爆丸の如きも決して空想せなかつた事でもなかろうし、また癩が癒ゆることも空想してゐる人もあろう、／しかしながら昔から空想が実現したといふことをよく聞くがこれは万が万嘘ではあるまい、我等は元気で我等の行くべき道を歩ゆまねばならない、これからどんな物が実現されるか、化学に期待するもの相当残されてゐると思ふ／つまらない空想や夢のやうなことを書いた。あしからず

**おっさん** 『青松』初登場の大塚一の稿は「腹の声」という題目

私は矢野のおさんが好きだ「いつまで入院してゐるのか病は気からだ／さゝと退院しろ」といふのもこのおさんだ、まだ退院は早い落ち着いて療養しろと言ふのもこのおさんである、これ今貰つたばかりの珍品だ、私が食ふよりお前が食ふ方が有効だといふて例の鮫の口の中に栗餅をほり込んで呉れたのもこのおさんであつた、島にとつては近来に

ない大雪であつた、明けやらぬ暁雲を突いて小窓を叩き今日は寒いから大根雑炊でもして貰へと政護院大根を置いてさつさつと帰つて行つたのもこのおさんだつた、／次期の総代問題に就いては石本氏の重任を切望するの聲が喧しかつた／三月の或る日矢乃おさんがつぶやいてゐのを聞くと石本さんを動かすのは何んでもない、たゞ「何事も総代さんへ一先づ第一にといふ腹に島中の人々がそれで足るとうそむいてをつた、矢乃のおさんは口無調法だ言ひ度ひこともよう言はん男だ、こんな名文句が彼の口から洩れるとは思はなかつた、おそらく腹中の誠が飛び出したと思つた、文は人なり人格なりといふことに思ひ及んでうなづかれた、私はこの名文句を誰れ彼れにも吹聴し又議長を通じて評議員会へも協力会も彼露してくれた、かくしてこの名文句が島中の気構へとなり、遂に石本氏の重任の切望が達せられた／雪聖<sup>キヨ</sup>く葉ごとに残る大根かな

矢野・矢乃という人物について、いまのところ詳細は不明。稿が示す事態の時期がいつかはつきりしないものの、総代選考のなかで、「島中の気構へ」が醸成されてゆくようすを記録しているめづらしい稿である。

もうひとつ大塚の文章がある。

温い新化学 大塚一／口腔が荒れ荒れで僅かに酸味を感じるばかりとなつた、看護婦さんが熱心に治療して下さつた、大塚さんと婦人の声がきこえた、H先生の声かと思つたが今頃おいでになる筈がないといぶかつてゐた呼びかけられて初めて時なん時の誤解心とわかつた薬など先生自から持参して下さる事など今だかつて経験したことのなかつたし、たゞたゞ恐縮してしまつた、お口を開けなさい新薬を入れてあげますからと続いて呼びかけられました、なんぼう心臓の強い私でも口を開くことが出来ませんでした、気兼ねをせずに口を大きくひらきなさいと言はれて私は例の鮫口を大きく開いた、この新薬大きいですよ、そうして手製の初物ですよといふてお帰りになつた、私はこの新薬を噛みしめた匂ひと味とでそれが初めて大苺であることがわかつた、たちまち涙が溢れた、呑み込もうとしても喉を通らなかつた、消え行く足音に耳を澄ませ手を合せ拝んだ、誰れも彼れもが一様に泣いてくれた、その日はめづらしい梅雨晴れであつた、窓を開けては

るかなる方を拝んでみたが悪性の胃腸病も俄かに快癒したかの様にぐるぐるぐると腸の働くのを覚えた、化学を基礎とする医学薬物はいかにと冷めたい感じがする、人間は生きてある、温い血が通つてある、将来東洋流の否日本流の医術の発達の方行はこの感状の線に添ふて発達するであろう／御手聖く賜ひし苺のしみわたる／大苺師の御手清く染めつらね／代筆者春峰氏に感謝する、大塚一

医療に代わる、あるいは医療を補う、特別なようすとはわたしはけしておもわないが、こうした「温か」さの記録を、隔離予防体制を糾弾するものたちは、どう読むのだろうか。

**自粛自戒** 半ペラの原稿用紙が横に綴じられ、罫目にかかわりなく、土谷勉の文字が記されている。

◎この一文は隣組長が順番に書いてある回覧板の複写であります。／今期の始め、即ち三月二十八日、石本さんがつづけて起つて下さることになった際、一同は総代を中心に一層自粛自戒することを申合せ、石本さんの御快諾を得た三月二十八日に因んで、月の二十八日を「吾らの自粛自戒強張日」とし、隣組長が順番に回覧板を作ることになりました。この一文は去る八月二十八日の複写であつて、議長熊野さんの御手数を煩しました。／土谷〔印影〕

つぎにその「回覧版」(1枚の手書き文書)が綴じてある。

自粛自戒強調に当りて／人格\*、識見\*、健康\*等三拍子揃つてみられる石本様は難局下に於ける我等の総代として最適任者であり尚且群を抜いてある旺盛なる精神の持主であることは敢て茲に繰返し述べる要はない\*無理も無理大無理と知つて引続き犠牲になつて頂きたいと懇請の一本槍を進んだのも全くこれがためであつた\*三月廿八日快諾の報に接したあの時の感激は誰一人として忘れることの出来ない嬉し涙の感激であつた\*総代として旺盛なる精神の下に水火の渦中に飛込んで昼夜の別なく敢闘して下さる石本様の雄姿に特攻精神に応へ進むべき途は何か\*それは口だけの自粛自戒でなく真の底力表裏なき心不言実行理屈云ふ間に一仕事である\*天地の恵大作者小作者各位の汗の努力総代として毎日汗だくの陣頭指揮には自ら全く頭が下るのみである\*この難局下にも拘らず

社会と対照して我々の生活振りはど一も各自が打診して見る時たれば感謝の連続であり  
 食ひ足りての腹鼓である\*戦局は遂に一大異変の下に已むなく終結を告げさせられた何  
 一つ国家に御奉公の出来ない我々だが日本国民として悲憤の熱涙痛恨措く能はざるもの  
 がある\*此際我等は惣てに於て特に自重せねばならぬと思ふが今後は更に一切の困苦欠  
 乏に堪へると共に尚一層の奮起が必要である\*金の尊さよりも汗の一滴が遥に尊い現実  
 であり尚且刻下の急務である挙島一致真の協力汗の奉仕 = 尚激励の一言が絶体肝要の今  
 日である\*尚これが協力は今朝に限られたことでなく来期に備へての絶体的協力の連継  
 連鎖でなくてはならぬと同時に協和会の幸福と発展の大きな鍵でなくてはならぬ\*忘れ  
 るな我等が契つた決議を — そして三月廿八日午後四時のあの感激を / \*終りに残暑厳  
 しき折柄両惣代様并詰所役員諸士の御健闘を更にお祈りして拙筆を擱く、暴言多謝 / 八  
 月盛夏 第 = = 隣 = =

いくつかの箇所の赤い○印が押されている。句点のようだが、かならずしもそうではなさ  
 そうだ。ここではそれを\*であらわした。

さきの土谷の稿を参照すると、この「自肅自戒強調に当りて」と題された文章は、1945  
 年8月28日の執筆となる。およそ半年まえとなる3月28日の決議が想起され、ここに自  
 分たちのかかげるあたらしい方向を、「自肅自戒強調に当りて」と題した文書で示してい  
 るのだろう。おそらくこれは、1945年8月15日以降に大島で記されたかなりはやい時期の  
 文書とおもわれる。

**罪** 松田美津夫は、「詩 / “罪人の声” / =病床必しも不幸の住家ならじ=」を詠う。

丹毒やみてベツトに伏す…… / 発熱 時のけじめあらせず / 夜半を苦痛と戦ふ…… / 祈  
 りしも楽しき福音 / 現世ならぬ声きゝぬ / うつつか はた恍惚りと…… ! / 警報発令中  
 …… / あわたゞし警備員の足音 / 遠ふざかりゆくをきくともなしに / 遮光されし灯火た  
 よりつ / ペン取る手さえふるえおのゝき…… ! / 高熱のきざし胸のあたりにおぼえつ /  
 意識のいやに冴え / 十時きくもなほに眠れず / 常ならぬペン取る姿 / めざめたるにはあ  
 やしく映らわくにも…… / いまだ我 確かなり / 高熱のためにかされたるにあらず /

斯くペンを取るに……ときわめつ／何時しかに苦しきの失せたるは…／確かなりと思ふ  
 我すでにあやしきか……／なにゝても可。／罪のいたみ きびしく／故なきに感謝求め  
 つゝ業なし／望み得られざりしを立腹し／体度に見せまじと努力せし昨日の姿／いな  
 わが罪心数を限らじ／時として 社会最上の罪！／いかりにまかせ殺人をさえ思ひめぐ  
 らし／良心あるをいなみてやまぬ時さえ保つ／我を愛くしみ生かすは誰ぞ……！／許し  
 能わざる罪想を抱く者／生かし尚も養なふ大自然！／更らに誠人の住ひたらしめんため  
 ／理想の都 きずきつゝある時の流れに／大能を見いだし是れを呪ふおろかさ……／あ  
 けすけに書きつづる……／＝大能者の名を保つ者よ／汝は人をして罪をせむる処いづく  
 にあり／しかり。罪の育み能ふ地を何故に備えし一／罪に育くむ理智は義しさを失ない  
 て論叫す／おろかなり、なにを論ずる 黙だせ／しかしてきけよ。内なる声を／＝人の  
 子 汝を罪に歩ましめる弱さ／其のおろかさこそ救ひの反省なるに＝音波なきかゝる声  
 をきゝたり。／実に 健やかなる者は医者を要せず／罪ふかきが故に恵みは深かし／心  
 安かれ しかして時の努力に／微力の如何を問わず／汝が全力を捧ぐる者たれかし……  
 ／子よ。人の子よ しかして大能者の子よ。／汝の手を我につくせ／汝の足を吾が名の  
 ために運べ／其の業の大小を問わず／自由の天地は汝の誠心により／我 熱にうなされ  
 つゝ／斯く思ひ至りてきずけば／額いにしづくする汗ぬぐひても落ち／全身ぬれて重荷  
 おろせし俊の安らかさ／おぼゆるほどに熱去りてありき／八月六日夜半

この号には、8月15日を前後する稿が綴じられていて、それがおもしろい誌面となっている。

松田の詩は、「No.」「No.23 10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙4枚に記されていた。その表面に。罫目のないその裏面も文字で埋まっている。冒頭に「感想」／“日ノ本ノ国”／松田美津夫／（用紙不足為に裏面使用す）」とあった。

『東海の離島 君主の別 明らかなる国存す』とて 其の昔 アジヤ諸国にあつては羨ましがられた程に 御皇室を中心の情味豊かな日本国は敗戦の苦渋を味ふに到つて尚さらに其の国体の有難さを 身近くひしひしと感じ胸ぬちにこみあげてくる熱いものがと

もすれば臉に滴くしさうに成つて来る……！／実に 東洋の真実の平和の到来に全力を  
集注して戦ひつゞけて来た祖国の雄々しい理想も宇宙を支配する時の主 大能者の前には  
余り香ぐわしいものでなかつたのか？いな 彼は日ノ本ノ国を愛してやまぬが故に  
最大の苦痛を味わひながら 世界の弱小国の地位にまでたゞき落し 真実の平和 戈に  
よつて得る処の勝利によりすぐれて失なわるゝ事の再びとない完全の勝利を与えるにふ  
さわしき者たらしめんがために試煉の時代をきたらしめたのか？人間我には明確ではな  
い／しかし わが日本民族は果して完全なる者であつたであらふか よしや東洋におけ  
る理想の現実を得たとしても十億に充つる諸民族の頭となつて指導し得るだけの能力と  
人格的に成長しきつて居るであらふか？／斯くの如く反省する時 明らかに短処を見い  
だす。かげ ひなたのある性質 どちらかと言えば成功を急ぎすぎる～～言ひかえれば  
目先欲にとらわれる人格的大いなる欠陥 此の欠陥があらゆる点において非難的とな  
りつゝあるのではあるまいか？／「安すからふ～～悪るからふ日本製品と外国人に見ら  
れて居るが如き。」更らに身近く反省すべきがある 一億一心を叫びつゞけれ居る戦時指  
導者の大部分が暗による利徳を得たとさえきく 実に人をねたみ 他人をかへり見ぬ人  
間的欠陥こそ敗戦を裏づけて居る。／私は叫びたい 私は叫びつゞけたい 祖国を愛し  
てやまぬが故に 我等日本民族の大いなる欠陥を反省し しかして 其の欠陥をおぎな  
いつくし 其のかげだに見る事のできぬまでに成長すべきであると。／他を知らんと希  
ふ時 先ず自己を知るべきである 『己が眼のチリぬぐわずして如何て他人の眼のチリ  
をぬぐひうるや』である。／思えば敗戦の苦惱骨にしみわたる さりながら欠陥を有す  
る者が大能者の前に立ちうることができやう／宇宙の大能者 支配者は全智全能たると  
せば如何なる条件の元にあつても世界の平和を時の潮流の中に建設するであらふ 我等  
日本民族は戈を有せずして世界平和のために全力を注ぎつくせば良い 自らを指導者の  
地位にひきあげるより他からおしあげられる者たらねばならない／実にボツタム宣言の  
前には我等日本民族は丸腰だ寸鉄を有せぬ者なのだ 此の境地に有つて 立ちあがる時  
それは戈による勝利の如くに易々たるものでないだけに全き勝利である。／思ふ 神国

日本 いかで神風吹かでおくべき さりながら 神風は吹くべき必然を要する処をのみ  
吹くのであつて 丸腰日本が平和のために誠実を希ふなれば全世界の前に奉仕者たらね  
ばならぬ／日本よ／世界に奉仕者たれ／一切を捧げて惜まざる者たれ／実に／自由の天  
地はひらけて招く／武力よ何者ぞ／自由の天地を 平和の世界を／設けるために奉仕者  
たる日本の前に／大能者の理想が現実しつゝある。／実に私は宇宙の一切が平和に向つ  
て前進し完成しつゝあると信ずるが故にである。／九月一日

同一人 8月6日と9月1日と日付のちがう2つの稿があり、あたらしくかわったところと、  
依然としてかわらないところがみえる。

**俳句** 多田勇の「俳句」8句——「炎天に壕堀る腕の黒さかな／壕を堀る汗の上着に風  
薫る／日にやけし体あらはに壕を堀る／病良し友と並んで西瓜食む／ふれて見る窓下にあ  
る四葩かな／折鶴の動くともなき暑さかな／白き足水にゆれつつ溪蓀剪る／白百合に姉の  
生花想ふかな」。3句めの「体」の字のわきに、「病軀」と赤インクで追記されている。

「壕堀る」「壕を堀る」の語句が時局を感じさせるだけで、ほかはひたすら夏を詠うか。

久我剛「青松俳句」8句——「雷雲を吐く小豆嶺や行水す／灯を消せば月ある窓や虫時雨  
／新涼や海へ影引く療舎の灯／雷雨去り星座再び巡り澄む／夜光虫月の出近き水明り／石  
投げて独り遊ぶ子秋の雲／秋空へ高々鳴れり脱穀機／種となる茄子の畑や秋旱」。

この時期の大島に脱穀機があったか。この詠草では、季節が夏と秋とがゆきつもどりつ  
しながら、秋となったか。

香山爽子「俳句」5句——「炎天や船火事見ゆる水平線／夕顔の花を浮べて日向水／日焼  
して去年の病ひを言はれけり／病ひよし虫干の書画抱きいづ／虫干の宮本武蔵借りにけ  
り」。

香山は女性か。彼女は夏を詠う。時局は？。

喜田正秋「噴井」8句——「山梔子の花咲く窓の手術台／ほとぼしる厨の水や栗の花／麦  
秋の裳裾ひくなり讃岐富士／ばらの蝶たゝめる翅の揚羽なる／打ち寄する波の穂白し五月  
闇／桑摘むや十四の月のはや高く／十六夜の月のあかりに桑を摘める／兵燹に燻れる庭の

噴井かか」。

喜田の稿は、「No.」「国華一号 10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙を使用。中央の余白に特徴のある記号がみえる原稿用紙だ。

**すめらみこと** 「折口信夫氏の万葉研究より。／小見山抄」と末尾に記載のある稿『『すめらみこと』の御義』は、「すめらみこと」の語義を説く。あえてこのときなのか、まえもって記されていた旧稿なのか、いずれにしても、この号にわざわざ載せたのだろう——

天皇を「すめらみこと」と申すことは、すめら一極めて尊き一みこもちの御義で、習慣として、みこもちは特殊な場合の外は みこと と略称して敬称とすることになつてみた。普通みこもちで通るのは宰太夫などの字を宛てゝ訓ましてゐる。天皇の御詔を「伝達」ことをする者の意義において宮廷から命じ遣された執行官の事である。〔中略〕天の下中で最尊い「みこもち」をなさる方は天皇でいらせられた。即 天つ神の命を伝達して、此の天の下に布かれるのだから。其が顕貴の神聖を示す為の「すめらみこもち」なる讃辞すめらみことと申すことになつた。

「伝達」者としての天皇。それはなにをあらわすか。いわゆる玉音放送とかかわりがあるか。

**あとがき** 半ペラ原稿用紙を横に綴じて、罫目にかかわらず文字が記されている。綴じ方はさきにおなじ、ペンも土谷勉の手になる。

あとがき◎十二巻と云へば青松にとつても意義なしとしない。十二ヶ月目の発行であつて、一年の終であるから一。この時局下、十二巻を編むとは感慨無量である。今後ともまだまだ如何様になるかはかり知れないが、日本人の心柱は失ひたくないものである。

／◎実の入らぬ本巻を過程の一環として大目に許されたい。／◎穂波兄に久振り稿をいたゞいた。やつぱり青松になくはならぬ大切な人である。御健康を祈りたい。／◎短、俳のさびれ方はどうだ。誰々が原稿を欠かさなかつたといふ論議はつゞいむとして前者の／笠居、綾井、浅の兄／後者の喜田、香山兄／この方々の御努力はうれしいが、久我、多田両兄加つて五指にみたぬとはなさけない。／飯でもやると言つたら書くかも知れぬ

と思へば、敗戦国民の根性をこゝに見せつけられるやうである。／◎十三号から一段と頑張りたいものである。出来ぬ筈がないのだから灯管も解除になるし、お互はもつともつと勉強したいものである(勉)

この2枚の原稿用紙にわたる「あとがき」のあいだに、もうひとつの「あとがき」がある。

あとがき◎灯火親しむ候にふさはしからぬ実のない編輯となつた。過程の一環として大目に許されたい。／◎穂波兄に久振り原稿をいたゞきうれしかつた。御健康を祈りたい。／◎短歌のさびれ方は淋しい／短歌の笠居、綾井、浅の兄／俳句の喜田、香山兄／の努力はうれしいが古豪久我と新鋭多田の両兄を加へて五指にみたぬとは何たることぞ。／一層の奮起を切望する／勉

この稿の冒頭にわたしが書いたとおり、本第12号の表表紙に貼られた題字記載紙の裏面にも「あとがき」が途中まで記されていた。土谷は「あとがき」執筆にさいして、少なくとも2枚の下書きを記したのか。

なお、香山は男性か。

**潮音** 綴じがはずれているため、もはや綴じ順の原秩序は推測によるほかないが、「あとがき」につづいてやはり土谷の稿「潮音」があったとおもわれる。

潮音／本夏南瓜供出総メ数／二六七二貫六〇〇／これが殖産部でうけた全部である。農耕者の汗と脂の頑張りに天候が応へ、果然、驚異的この新記録を樹立した訳である。／“南瓜さま、ほんとに有難う”／心からお礼をのべたい。さて、次のたのしみは甘藷／殖産部のヨ想収穫量は四千五〇〇メ／“いもよ、心あらば吾に応へよ”土谷〔印影〕／藪蔓を被り負ひたる女かな一鶏助一

この時期の大島ではかぼちゃが在園者の生を担う重要な食糧だったようだ。

**終結** つづく泉俊夫「初秋の或る日」は順序がさかさまに綴じられていたのかもしれない。

満洲に高気圧が現われたからやがて美しい秋空が見られるでしょう、苛烈なる戦ひの終結した現在、寂かに訪れる秋の気配のなかで幾年振りかで聞く天気予報に何か沁み沁み

とした気持になり乍ら、晴れ初めた空を見詰める、雲の切れ間から覗く浄らかにも美しい碧空、秋だ、秋が来たのだ、傍らの切岸には伸び切ったすゝきの幾株かゝあつて、折からの陽射しを浴みて青い光りを放つてゐる、赤いとんぼも絶えまなくほしい儘の翔びざまを見せてゐる、時々大きな奴が何処からか現われて人数の少い午後の部屋の内らまで飛び込むで来ては、直ぐ体を返して出てゆく、蚊か蠅を漁つてゆくのであらう、私は八月十五日以来頭も心も呆けた様になつて仕舞つて、何んにもする気がしなかつた、おまけに数日来の雨だ、実際くしゃくしゃして腹立たしい程だつた、今日は久し振りに御天気は良くなるし青松十一号も廻つて来たので非常に嬉しくなり、早速開いて見る、皆の力作力詠に比べて自分の存在の何んと淋しい事か、モツト頑張らなければと思ふ、何時も思ふ事だが、林先生には熱心に批評や感想をのべて下さる、誠に感謝に堪へない、十一号中異彩を放つてゐるのは中島、中井両君の絵だ、良く出来てゐる、あの時の光景其の儘だ、私も四日の払暁退避命令の出る直前空襲下の高松を望見した、ほんの僅かの間ではあつたがあの光景は強よく強よく印象に残り、私も終生忘れる事が出来ないであらう、両君の絵を比較して見ると、同級の少年と少女の感情などもよく現われてゐて非常に面白い、苛烈極まりない様相を示して来てゐた戦局も、聖断ひと度下り、遂に終結した、思へば誠に堪へ難く残念の極みである、戦争中何一つとして御報いする事の出来なかつた、私達でさへ之である、産業戦士の方々、まして陸海将兵の方達は、断腸の思ひであらう、吾々の愛する青松も、十二号を以つて満一ヶ年を迎へようとしてゐる、藻汐草休刊以来苛烈なる戦局の動きと共に、私達の心の糧として、友として、紙不足も何んのその難なく生長して来る事が出来たのも、園長先生初め御役所愛読者の方々と共に林先生の限りない愛情の賜ものであり、土屋、浅野両氏のたゆみない努力の御陰である事を深く思ふ、青松は私達が幸ひにも会はなかつた空爆にあつてゐる、然も園長先生と生死を共にしたのである、私は高松市の空爆を思ふ毎に、あの時の光景を想ひ泛べては、熱いものがこみあげて来るのを如何する事も出来ない、火焰倒まゝなかを犇と青松を抱いてゐて下さつたであらふ、園長先生の御心に触れて限りない感謝を捧げて止まない次

第である、戦ひは終結した、誠に堪へ難きを堪へ忍び難きを忍んでの終結である、ましてすでに新しい日本建設への尊とくも涙ぐましい戦ひは初まつてゐるのである、私達は社会の方々に決して愧ぢない心構へと、態度を以つて療養の日月を生きてゆかなければならない、何時のまにかすつかり夕づいて来て仕舞つた、切岸のすゝきも光りを失つて仕舞つてゐる、赤いとんぼは相変らず高く低く翔び廻つてゐる、何処かでもう鳴き初めし虫の声が涼しい夕風と共に聞こえて来る

赤とんぼの飛ぶ初秋は、戦争終結直後のそのあととなる戦後の始まりだったのだろう。

泉がいう「十一号中異彩を放つてゐるのは中島、中井両君の絵だ」とは、前第11号に綴じられた挿絵のことで、子どもたちが描いたおそらく水彩画だろう。残念ながらそれらは散逸してしまったようだ。

**募集** そのつぎは、土谷がよく記す太い波線で囲まれた文章――

時局の急変で回覧する必要ないと言ふ向きがないでもないが、断然、回覧することにした。／十二号の原稿も依頼したいと思ふ／べ切は九月十日／緊揮一番、書いて下さい。  
／回覧順 三病香山／林一松田、長野一斉木、長田一小見山、大田井一田根一熊野一喜田一泉、松本、大原一朝の、学校

これは前第11号に貼ってあるはずの原稿募集と回覧順を記した罫紙だろう。いつのときか剝がれてこの号に紛れこんでしまったか。

**秋** 裏表紙見返しに、岩崎緑雲による「虫」の題での7句を記した紙片が貼付――「門を出て虫の世界を歩きけり／虫きいて虫の世界に遊びけり／大空にたゞ月ばかりありにけり／名月やいくさはすみぬ夢のごと／名月やいつもの島が窓にあり／みんなから＝れし月の杖運ぶ／名月やすでに出てゐる舟のあり」。

この1945年ほど、虫や月の秋がまちどおしい年はなかったか。

**回覧順** 第12号の裏表紙に「廻順」を記した紙片が貼付してある。

廻順／香山一笠居一松田一斉木一長田一小見山一隣組長田中一大田井一熊野一喜田一泉一赤沢一多田一浅の一図書室／諸兄様／㊦

これは五線紙だ。回覧順の裏をみるとそれは、「国民義勇隊の歌」の譜面だった。「(大朝浜田光雄氏の好意によ $\equiv$ )」との附記がある。戦時はもはや反故となった。